

Aichi Triennale 2025:
A Time Between
Ashes and Roses

DIGEST | ダイジェスト

国際芸術祭
あいち
2025
灰と薔薇の
あいまに



灰と薔薇の「あいま」で 「来るべき世界」を思考した芸術祭

第6回を迎えた国際芸術祭「あいち」は、
2025年9月13日から11月30日までの79日間にわたり、
愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかの3会場で開催しました。
初めて海外から招いた芸術監督フル・アル・カシミが掲げる
テーマ「灰と薔薇のあいまに」のもと、
22カ国・地域から62組のアーティストが集結しました。
やきものの街・瀬戸にちなんだ作品や、漫画家によるキービジュアル、
多くが世界初演となったパフォーマンス、
誰もが参加できるラーニング・プログラムなど、多彩な事業を展開しました。
「あいち2025」の様子はSNS等でも広く拡散され、約52万人が来場しました。
世界各地から集まったアーティストによる作品を通して
「来るべき世界」を思考する芸術祭となりました。

是恒さくら「白華のあと、私たちのあしもとに眠る鯨を呼び覚ます」2025



愛知芸術文化センター



愛知県陶磁美術館



瀬戸市のまちなか

CONTENTS

閉幕によせて	4
開催概要・開催目的・テーマ	5
移ろう季節と共に歩んだ79日間	6
現代美術	
愛知芸術文化センター	8
愛知県陶磁美術館	12
瀬戸市のまちなか	14
日常と芸術祭をつなぐキービジュアル	17
パフォーマンス	18
ラーニング	20
巡回展示「ポップ・アップ!」	22
アートラボあいち	
数字で見る「あいち2025」	23

国際芸術祭「あいち2025」ダイジェスト

表紙デザイン: 伊藤敦志 (AIRS)

本文デザイン: 株式会社山崎デザイン事務所

撮 影: タカギユスケ [表紙,P2(上,左下),P3(下),P4(下),P10(下),P11(右上),
P14(上),P15(上段:2,3枚目,右下),P17(上段)]
三浦知也 [P2(右下),P6(一部),P7(一部),P9(上,左下),P11(左下),
P13(上,右下),P16(上段:右列左下,①),P17(右下),P18(右下),P21
⑤,下段:左,中央,裏表紙]
岡松愛子 [P6(一部)]
相模友士郎 [P6(一部),P18(下段:上,左下),P19(上段:右下,下段:上)]
あい撮りカメラ部 [P8(下段:上),P11(右中央,右下),P13(左下),P17
(上段:左下),P20(上),P21(①,③,④)]
ToLoLo studio [P8(下段:下),P10(上),P11(左上,左中央)]
怡士鉄夫 [P12,P13(左中央)]
城戸保 [P14(下段:上),P15(右上),P16(左,上段右列:上,右下),P17
(上段:中央右),P22(上)]
羽鳥直志 [P18(上),P19(右上,下段:下)]

編 集: 阿部慎一郎/松原千紘(びあ株式会社)

発 行: 国際芸術祭「あいち」組織委員会

発 行 日: 2026年3月10日

表 紙: 愛知芸術文化センター ムルヤマ《海流と開花のあいだ》2019-
裏表紙: 愛知県陶磁美術館 キービジュアル

— 閉幕によせて —

「あいち2025」からより良い未来へ



国際芸術祭「あいち2025」が無事に閉幕しました。ご来場いただいた多くの方々に、心からお礼申し上げます。また、62組の参加アーティストにも改めて深く感謝したいと思います。世界はまだまだ混沌としており、戦争や環境破壊は収まる気配がありません。そのような状況においても、声を聴くべき人たちのために、芸術は重要な役割を果たせるのだと思います。国際芸術祭「あいち2025」で皆さんと共に過ごした時間は、一緒に集い連帯することでより良い未来を築いていくのだという決意を、ますます強いものにしてくれました。

芸術監督 フール・アル・カシミ

総来場者数

524,069人

参加国

22
の国と地域

アーティスト

62組

経済効果

約78億円

〈開催概要〉

国際芸術祭「あいち2025」

会 期：2025年9月13日(土)～11月30日(日)[79日間]

会 場：愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなか

芸術監督：フール・アル・カシミ [シャルジャ美術財団理事長兼ディレクター、国際ビエンナーレ協会(IBA)会長]

主 催：国際芸術祭「あいち」組織委員会 [会長 大林剛郎(株式会社大林組取締役会長兼取締役会議長)]

〈開催目的〉

- ・新たな芸術の創造・発信により、世界の文化芸術の発展に貢献します。
- ・現代美術等の普及・教育により、文化芸術の日常生活への浸透を図ります。
- ・文化芸術活動の活発化により、地域の魅力の向上を図ります。



〈テーマ〉

灰と薔薇のあいまに A Time Between Ashes and Roses

詩人アドニス『灰と薔薇の間の時』の心情とヴィジョンに共鳴するこの芸術祭は、人間と環境とを分断する国家や領土といった視点を越えて、地質学的な時間軸から見える未来の展望を提示します。戦争や開発、災害のような破壊を象徴する「灰」と、共生や繁栄を象徴する「薔薇」、その二極化を避け、両者の境に疑問を投げかけながら、人間と環境の複雑に絡み合った関係についての幅を持った思考を模索します。



国際芸術祭「あいち2025」オープニングセレモニーの様子



Look back at Aichi Triennale 2025

夏から秋へ、移ろう季節と共に歩んだ**79**日間

盛夏の熱気に包まれながら開幕に向けた準備を進め、厳しい残暑のなか幕を開けた「あいち2025」。
秋風とともに表情を変えながら賑わいと感動を生み出しました。

開幕前

多くのアーティストが作品制作のため愛知でリサーチを行いました。県民との共同制作や事前イベントを通じて機運を盛り上げました。



会期中の多彩なプログラム

参加アーティストが自身の制作背景や意図を直接語る「アーティスト・リレートーク」や、感想を他の人と分かち合う対話型鑑賞ツアーなど、鑑賞体験をより豊かにするプログラムを展開しました。



11/30 閉幕

秋の深まった最終日。会場にはアーティストたちも駆けつけ、常連の芸術祭ファンから、SNS等で興味を持った若者まで、世代や国籍を超えた来場者の温かい拍手に包まれながら幕を閉じました。



9月

9/13 開幕

世界各地から集まったアーティストたちと共に芸術祭が開幕しました。開幕週のパフォーミングアーツ公演の一つでは、名古屋のクラブを貸し切って、パレスチナを拠点に活躍するアーティストと地元愛知のアーティストによるDJやライブ演奏を繰り広げ、熱を帯びた空間を生み出しました。



11月

11/1-3

炎を囲む三日三晩—— 「瀬戸」に触れる特別な時間

愛知県陶磁美術館の復元古窯で三日三晩焚き続ける炎を囲みながら、フードや雑貨の屋台、音楽ステージなどが楽しめる「ホノノ夜市」をはじめ、瀬戸の歴史と風土に触れるさまざまなプログラムを実施。地域と芸術祭が交差する、賑わいのある空間が生まれました。



愛知芸術文化センター

Aichi Arts Center

愛知県の文化芸術の発信拠点である本会場は、2010年以来、国際芸術祭「あいち」の拠点でもあります。愛知県美術館ほか、複数のフロアで現代美術を展示し、愛知県芸術劇場ではパフォーマンスの作品を上演、またラーニングセンターやショップを各所に設置しました。

地下2階フォーラムIIでは、建物の吹き抜け構造を活かし、久保寛子の災害や戦争による破壊と再生を描いた巨大な作品が来場者を迎え、10階ロビーでは色鮮やかな海洋生物に満ちた「理想的な海」を表したムルヤナによるダイナミックな作品が、奥の展示室へと誘いました。硬質なコンクリートと繊細な髪の毛という対照的な素材を用いて公と私、強さと脆さの境界を詩的に問い直すアフラ・アル・ダヘリや、イラク戦争での爆撃の刹那の光景に、破壊と新たな生命の誕生や希望の兆しを重ねたバーシム・アル・シャーケルの作品は、来場者に驚きと発見をもたらしました。伊勢湾や三河湾での人と鯨のかかわりの歴史を壮大なインスタレーションに仕立てた是恒さくらや、磁器土とガラスを融合させてやきものの根源を探求した小川待子など、土地と結びついた作品を含む多彩な展示が、現代社会の課題や人と環境の関係への深い考察を促しました。

愛知の文化芸術の拠点から

「灰と薔薇のあいま」を思考するアートを発信



久保寛子《青い四つの手を持つ獅子》2025

アーティスト

- | | |
|---------------|---------------------|
| 久保寛子 | 浅野友理子 |
| 札本彩子 | カマラ・イブラヒム・イシャグ |
| ムルヤナ | ロバート・ザオ・レンファイ |
| 杉本博司 | クリストドゥロス・パナヨトゥ |
| 太田三郎 | マユンキキ |
| 水谷清 | ムハンマド・カゼム |
| 宮本三郎 | イキバウクルル |
| ウェンディー・ヒュバート | バゼル・アッバス&ルアン・アブ=ラーム |
| 大小島真木 | ソロモン・イノス |
| アフラ・アル・ダヘリ | 是恒さくら |
| 諸星大二郎 | ジョン・アコムフラ |
| 山本作兵衛 | ミルナ・バーミア |
| 川辺ナホ | |
| ダラ・ナセル | |
| バーシム・アル・シャーケル | |
| ハラール・サルキシアン | |
| 小川待子 | |
| シルビア・リバス | |
| プリヤギータ・ディア | |



小川待子《水盤》2024



プリヤギータ・ディア《熱の哀歌》2023



諸星大二郎 展示風景



大小島真木 展示風景



アフラ・アル・ダヘリ 展示風景



バーナム・アル・シャーケル 展示風景



ハライル・サルキシアン《奪われた過去》2025



ダラ・ナセル《ノアの墓》2025



浅野友理子《地続きの実り》2025



ミルナ・パーミア《サワー・コード》2024



イキバウキクルル《扉開けてくろ》2025



バゼル・アッバス&ルアン・アブ=ラーメ
《忘却が唇を奪わぬよう：私たちが震わせる響きだけが》2020-2022

愛知県陶磁美術館

Aichi Prefectural Ceramic Museum

窯業地・瀬戸の自然豊かな環境に建つ愛知県陶磁美術館は、さまざまな角度からやきものにアプローチできる陶磁専門のミュージアムです。この特徴を活かして、「灰と薔薇のあいまに」というテーマを、陶土やそれを育ててきた地質学的な時間といった切り口から深く掘り下げる作品を重点的に配置しました。本館を中心に、デザインあいち、つくるとこ 陶芸館、茶室「陶翠庵」、広大な芝生広場といった野外空間まで、敷地の隅々まで回遊しながら芸術祭を楽しめるよう展示を構成しています。

本館エントランスでは、黒人女性の身体を扱うワンゲシ・ムトゥや、地形の変化を凝縮したかのようなエレナ・ダミアーニの力強いインスタレーション作品が来場者を出迎え、吹き抜けには2022年のヴェネチア・ビエンナーレで金獅子賞を受賞したシモーヌ・リーの巨大な彫刻作品を複数展示しました。また、瀬戸でのリサーチを重ねた西條茜は、窯業における労働と身体の関係に着目した新作を発表し、加藤泉は自作と愛知県陶磁美術館のコレクションを組み合わせるなど、作品を通じてこの場所ならではの歴史との対話を展開しました。

アーティスト

- エレナ・ダミアーニ
- ワンゲシ・ムトゥ
- マリリン・ボロル・ボール
- ヤスミン・スミス
- 西條茜
- シモーヌ・リー
- シモーヌ・ファタル
- チャヌーパ・ハンスカ・ルガー
- 永沢碧衣
- Barrack(古畑大気+近藤佳那子)
- ハイブ・アース
- 加藤泉
- 大小島真木

緑豊かな陶磁専門ミュージアムで、地質学的な時間とアートが交差



シモーヌ・リー《無題》2025



チャヌーパ・ハンスカ・ルガー《いまを生きる(家路)》2022-2025



エレナ・ダミアーニ《レリーフIII》2025



加藤泉《無題》2010

マリリン・ボロル・ボール
《水はコンクリートになった——〈山が奪われセメントがもたらされた〉シリーズより》2023/2025



ワンゲシ・ムトゥ《眠れるへび》2014-2025



西條茜作品 パフォーマンス風景

瀬戸市のまちなか

Seto City

せともの(瀬戸物)の街ならではのバラエティに富んだ会場に、作品を展示しました。やきもの原料となる粘土を製造している株式会社 加仙鉱山、かつては陶工たちで賑わった銭湯の旧日本鉱泉など、普段は立ち入れない場所で作品を味わいながら、同時に瀬戸の産業や街の歴史と出会うこともできました。

窯業やそれを取り巻く暮らしにまつわる植物に着目した佐々木類は、植物を封じ込めたガラスによるインスタレーションで、旧銭湯に堆積した時間を浮かび上がらせました。廃校になった小学校のワンフロアを使ったアドリアン・ビシャル・ロハスは、文明の過去と未来を見据える長大な時間軸を、終末論的で詩的なインスタレーションを通じて表現しました。現役の粘土工場では、西オーストラリアの先住民族ヤウルの末裔であるロバート・アンドリューが、自らのアイデンティティを瀬戸の地層に重ね合わせながら、土の色や質感を活かした動きのある作品を生み出しました。漫画家のpanpanyaは、過去と現在の瀬戸をめぐる虚構の物語を描いた作品の一コマを、まちなかの各所に掲示し、現実の瀬戸と物語とが交差する体験を来場者に提供しました。

アーティスト

佐々木類 / 旧日本鉱泉

ミネルバ・クエバス / 瀬戸市美術館

シェイハ・アル・マズロー / 瀬戸市美術館

セルマ & ソフィアン・ウイスィ / 瀬戸市新世紀工芸館

メイサ・アブダラ / 瀬戸市新世紀工芸館

panpanya / 瀬戸市のまちなか、松千代館

富安由真 / ポップアップショップ

アドリアン・ビシャル・ロハス / 旧瀬戸市立深川小学校

ロバート・アンドリュー / 株式会社 加仙鉱山

沖潤子 / 無風庵

マイケル・ラコウィッツ / 梅村商店

土と技が息づく街角で、生きた歴史とアートが共鳴する



佐々木類《忘れじのあわい》2025



panpanya《何物》2025



ロバート・アンドリュー《内に潜むもの》2025



アドリアン・ビシャル・ロハス《地球の詩》2025

Key Visual

日常と芸術祭をつなぐ

「あいち2025」のキービジュアル

「あいち2025」の象徴となったのは、漫画家・五十嵐大介がテーマをもとに描き下ろした2つのキービジュアルです。大型サインやラッピングカーとして街の至る所に出現しました。また、公式グッズとして、キービジュアルをあしらったアイテムを多数展開し、瀬戸の職人が手がけたセトノベルティの薔薇など、独自のアイテムが人気を博しました。「灰と薔薇のあいまに」を鮮やかに具現化したその世界観は、日常と芸術祭をつなぐ架け橋となりました。



マイケル・ラコウィッツ 展示風景



富安由真《The Silence (Two Suns)》2025



沖潤子《anthology》2025



ミネルパークエクスプレス《子供たち》2025



愛知芸術文化センター 地下連絡通路



愛知県美術館10階ミュージアムショップ(愛知芸術文化センター)



デジタルサイネージ 名古屋地下鉄名古屋駅



ラッピングカー



瀬戸市のまちなか 階段



会期中の賑わい

「あいち2025」の開催により、瀬戸市のまちなかには世代を超えて多くの人が集まり、かつての賑わいを取り戻した会場もありました。

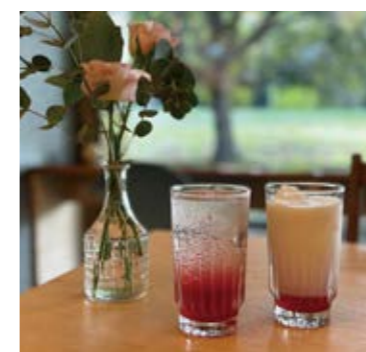
- ①せと末広町商店街
- ②旧日本鉱泉
- ③旧瀬戸市立深川小学校
- ④銀座通り商店街



カフェ・ギャラリー

瀬戸市を拠点とする「あいち2025」参加アーティスト「Barrack(古畑大気+近藤佳那子)」がカフェ・ギャラリーをオープンし、交流の場を創出しました。

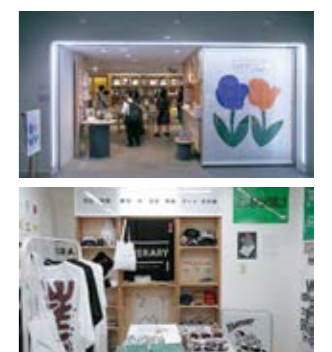
Who are you たそかれ (愛知県陶磁美術館)



コラボレーションショップ

地域のカルチャーと繋がる場として、アート鑑賞の合間に立ち寄れる2つのコラボレーションショップを設けました。

(上)TEMPORA (愛知芸術文化センター)
(下)LIVERARY Extra Season5 (瀬戸市のまちなか)



パフォーマンスアート

世界初演が多数。創造と対話を生む、多彩な表現を繰り広げた舞台芸術。

会期中の毎週末、ダンス、演劇、パフォーマンス、サウンド・インスタレーションなど全9演目のパフォーマンスアーツ作品を上演しました。愛知県芸術劇場を中心に、市内のクラブ、愛知県陶磁美術館 芝生広場、瀬戸蔵つばきホールなどの空間で展開しました。

テーマ「灰と薔薇のあいまに」を掘り下げ、「自然と人間の関係」「戦争と記憶」「支配と不均衡」という3つの観点から、人間性の回復や既存の価値観では見えてこなかったような物語や身体性を感じられる作品を、オセアニア、アラブ、アジア、アフリカから紹介し、その多くが世界初演、日本初演です。

また、字幕や音声ガイドによる鑑賞サポートや、鑑賞マナーをゆるくするリラックス・パフォーマンス等を導入し、「誰もがアクセスできる環境」を目指してアクセシビリティにも力を入れました。



ブラック・グレース『Paradise Rumour』



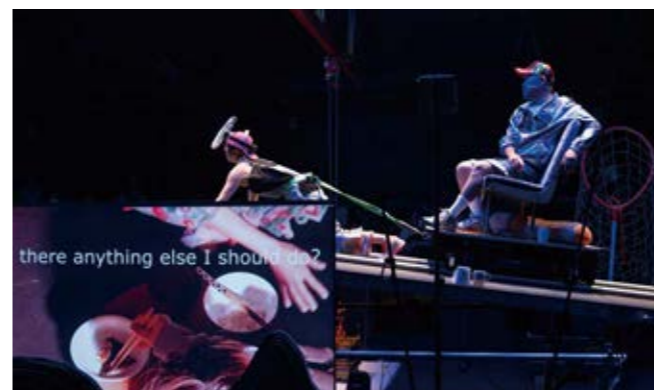
セルマ&ソフィアン・ウイスイ『Bird』



マユンキキ+『クシテ』



態変『BRAIN』



オル太『Eternal Labor』



AKNプロジェクト 喜劇『人類館』



クォン・ビョンジュン『ゆっくり話して、そうすれば歌になるよ』



フォスタン・リニエクラ『My body, my archive』

ブラック・グレース 『Paradise Rumour(パラダイス・ルーモア)』
9月13日(土)～9月15日(月・祝) 愛知県芸術劇場 小ホール

バゼル・アップス & ルアン・アブ=ラーメ、バラリ、ハイカル、ジュルムッド
『Enemy of the Sun(エネミー・オブ・ザ・サン)』
9月13日(土)、9月14日(日) Live & Lounge Vio・CLUB MAGO

クォン・ビョンジュン 『ゆっくり話して、そうすれば歌になるよ』
9月13日(土)～9月21日(日)、10月25日(土)～11月9日(日)
愛知県陶磁美術館 芝生広場

態変 『BRAIN(ブレイン)』
9月26日(金)～9月28日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール

マユンキキ+ 『クシテ』
10月3日(金)～10月5日(日) 瀬戸蔵つばきホール
10月12日(日)～10月13日(月・祝) 愛知県芸術劇場 大リハーサル室

オル太 『Eternal Labor(エターナル・レイバー)』
10月10日(金)～10月19日(日)※10月14日(火)を除く
愛知県芸術劇場 小ホール

セルマ & ソフィアン・ウイスイ 『Bird(バード)』
11月14日(金)～11月16日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール

AKNプロジェクト 喜劇『人類館』
11月22日(土)～11月24日(月・振休) 愛知県芸術劇場 小ホール

フォスタン・リニエクラ
『My body, my archive(マイ ボディ・マイ アーカイブ)』
11月28日(金)～11月30日(日) 愛知県芸術劇場 小ホール

ラーニング

誰もが安心してアートを楽しむために、共に学ぶ場をつくるラーニング・プログラム。



聞こえない・聞こえづらい方のための対話型鑑賞ツアーの様子

ラーニング・プログラムでは、誰もが安心して楽しめる環境づくりを目指し、来場者やボランティア、地域の人たちがそれぞれの立場で積極的に芸術祭に参加できる仕組みづくりを行いました。愛知芸術文化センター内の「ラーニングセンターへたち」と、瀬戸市内の「ラーニングセンターせと」の2カ所に拠点を設け、来場者が気軽に休憩し、ラーニング・プログラムに参加できる学びと憩いの場として機能するようにしました。

ボランティアの登録者数は1,099名にのぼり、会場運営のサポートや、参加者同士の対話を軸に鑑賞を行う「対話型鑑賞ツアー」を実施するなど、さまざまな活動を通じて芸術祭を支え、盛り上げました。

また、子どもたちが現代アートに触れ、楽しんでもらう機会となるよう、教育機関と連携し、学校向けの団体鑑賞プログラムも行いました。視聴覚に障がいのある方や小さな子どもを連れた方など、さまざまな人を対象にツアーや鑑賞サポートを行い、日本語以外の言語を母語とする方向けに、やさしい日本語チラシを配布するなど、アクセシビリティを向上させる取り組みも実施しました。



ラーニングセンターへたち



ラーニングセンターせと

- ①対話型鑑賞ツアーの様子
- ②ラーニングセンターへたち
ラーニングボランティアの活動展示
- ③聞こえない・聞こえづらい方のための
対話型鑑賞ツアーの様子
- ④ラーニングセンターへたち ライブラリー
- ⑤瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」
ワークショップ「星をつくるテーブル」
の様子
- ⑥ラーニングセンターせと
ラーニングボランティアの活動展示



ラーニング・ラーニング

“ラーニングを学ぶ”ことをコンセプトとし、参加者一人ひとりが、自分たちの立っている場所をともに学ぶ・知る・気づく・対話することを重視する参加型プロジェクト。さまざまな専門家を招いたトークイベントや、ディスカッション、ワークショップを行いました。



瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」

ガーナを拠点にアートとデザイン、そして環境に配慮した建築の融合に取り組むスタジオのハイブ・アースと協働し、伝統技法である「版築(はんちく)」と土をテーマにしたプロジェクトは、人間の営みと環境とのつながりを考える機会となりました。



学校向けプログラム

教育機関と連携し、学校向け団体鑑賞プログラムを始めとした学校向けプログラムを実施しました。次世代を担う子どもたちが現代アートに触れるきっかけを作り、楽しみながら、自分なりの感性でアートを味わう貴重な体験をサポートしました。



「あいち2025」参加アーティスト14組の作品が県内の4つのまち(豊田市、設楽町、大府市、豊川市)を巡る、移動型の巡回展示「ポップ・アップ！」を行いました。アーティストが企画するワークショップや「あいち2025」の学芸スタッフが作品を分かりやすく解説するガイドツアーなども実施することで、「あいち2025」の会場にとどまらず県内に広く現代アートの魅力を発信し、

より多くの方が気軽に楽しめることを目指しました。また、五十嵐大介による芸術祭のキービジュアル原画も展示しました。

〈開催市町〉
 豊田市会場:10月24日(金)~10月26日(日)
 設楽町会場:10月31日(金)~11月3日(月・祝)
 大府市会場:11月7日(金)~11月9日(日)
 豊川市会場:11月14日(金)~11月24日(月・振休)
 ※11月17日(月)を除く

Pop up!



アートラボあいちには、国際芸術祭「あいち」をはじめ現代アートに関する情報を収集し、発信する拠点です。会期中は、愛知県内4つの芸術大学(愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学、名古屋造形大学、名古屋学芸大学)とアートラボあいちがプロジェクトチームを組み、今後の活躍が

期待されるアーティストを1名ずつ選出し、4つの個展を連続で開催しました。アーティストトークや専門家によるレクチャーなどの関連イベントも実施。また、芸術祭の参加アーティストが愛知で行ったリサーチ資料などを集めて公開し、その思考の過程を辿れる場を提供しました。

Art Lab Aichi

数字で見る「あいち2025」

アーティスト数 62組	参加国 22 の国と地域	展示面積 14,600m² 愛知芸術文化センター 7,600m ² 愛知県陶磁美術館 4,100m ² 瀬戸市のまちなか 2,900m ²	
総来場者数 524,069人		企業・団体・個人の支援件数 124件	ボランティア登録者数 1,099人
1日の最多来場者数 24,147人 <small>※11月2日(日)</small>	平日の平均来場者数 3,739人	学校向け団体観賞プログラム参加校数 33校 1,738人	
土日祝の平均来場者数 11,624人	経済波及効果 約78億円		パブリシティ効果 約13億円

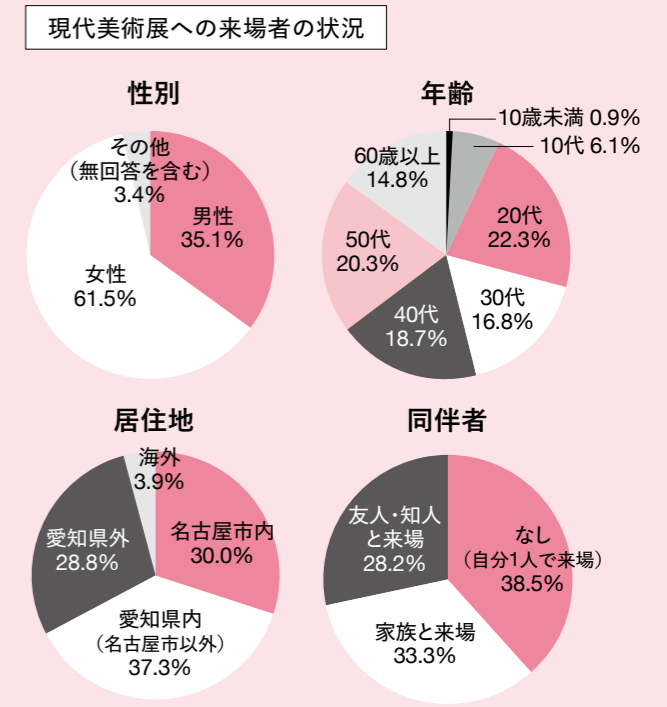
WEB

会期中の公式サイトアクセス数
1,253,275PV 507,729セッション
※PV(ページビュー):サイト内のページが表示された延べ回数 ※セッション:ユーザーがサイトを訪問した回数

SNS

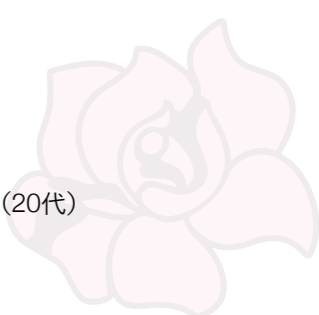
Instagram フォロワー総数:18,082 投稿数:476件	X フォロワー総数:5,136 ※11月30日時点 投稿数:1,037件
Facebook フォロワー総数:2,048 投稿数:493件	YouTube チャンネル登録者総数:804 投稿数:24件 合計再生回数:46,298回

※2026年1月31日時点、投稿数は2023年4月1日~



来場者の声 (現代美術展来場者アンケートより)

- ・芸術祭を通じて、地域や芸術の魅力をより発見できてよかった。(10代)
- ・視覚的・聴覚的にも今まで訪れた展覧会でトップレベルだった。(20代)
- ・作品の内容を少しでも理解できるようにわかりやすくサポートしている部分がよかった。(20代)
- ・地元の風景の中にアート作品が溶け込んでいるのが非日常的でワクワクした。(30代)
- ・漫画家の作品をアートとして芸術祭で楽しめたのがよかった。(30代)
- ・美術館では見ることのできない、規模の大きな展示や、建物を活かした展示に圧倒され、特別な体験ができた。(40代)
- ・街とアートの融合が素晴らしかったので、今後も大小問わず魅力ある街を展示会場にしてほしい。(50代)
- ・宣伝をもっと広域で行い、新聞などの美術欄に載せる回数を増やしてほしい。(60代以上)
- ・戦火の絶えない現在に、現地やゆかりの人々の多くの感情を芸術に託して伝える大変貴重な機会だった。(60代以上)





国際芸術祭
あいち
2025
灰と薔薇の
あいまに

Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses

